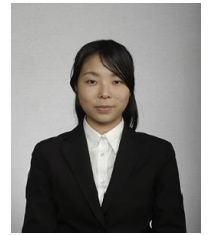


モノから見る台所 ー 奄美大島を事例としてー



K07088 深澤ひかる

Keywords

台所 モノ 火の神
農業 客 行事

1. はじめに

1.1 モノと人との関係について

住居空間には、たくさんのモノが存在している。そのモノ自体には特徴はないかもしれない。しかし、それを所持している人にとっては意味深いモノである。人は無意識的にモノで自分らしさを表現しているのかもしれない。モノを見ることでその人の暮らしぶりを知ることができるのではないだろうか。

1.2 研究目的

本研究では、住居内の台所という空間にしばってモノを見ていく。台所はどの住居にも必ず存在し、さらに設備や家財道具が特徴的であることから、調査範囲が明確である。加えて、台所で繰り広げられる行動は居間などと異なり特定のパターンがあると考えられるものの、生活者によって違いがある。台所は食事を作る場であることは共通しているが、どのような手順で働くのかということなどに違いがある。生活者の数だけ違いがあると考えられる。つまり台所は生活者と密接な関係にあるため、生活者の考えが最も表れている場といえるだろう。

本研究では、鹿児島県大島郡龍郷町A地区の住居の台所を対象としたモノの調査により、はじめに、A地区の台所の特徴を明らかにする。そしてその特徴からA地区の人々の生活の特徴を究明し、A地区の台所のあり方を考察することを目的とする。

1.3 研究方法

2010年7月25日～8月17日の24日間、A地区で現地調査を行った。

住居の台所を調査対象とし、範囲をキッチンセットを基点として炊事関連の物品が置かれているところまでとした。そして、台所内に配置されている大型生活財に着目した。まず、家財道具も含めた台所の見取り図を作成する。そして全ての家財道具（収納のための棚などで、

冷蔵庫以外の家電製品はモノとして扱う）の三面図を取り、寸法、収納の形式（引き出し、観音開き、片開き、片引き戸、引き違い戸、オープンなど）を記録する。同時にその家財道具に収まっているモノの使用頻度等の聞き取りを行い、家財道具に属する全てのモノを以下に示す4つの領域①～④に分け、記録した〔澤：2008〕。ただし、自家製の酒・漬け物等以外の食材、冷蔵庫の内部のモノは除外した。

①アクティブ・スタンバイ領域

用途に応じて活用している、移動が頻繁なモノ

②プロパティ領域

あったら便利だが、存在を忘れていた、もしくは使ったことがないモノ

③スクラップ領域

全く使わない、もしくは捨てるつもりモノ

④その他

飾りだけ、もしくは思い出があって捨てられない（信仰に関わる物品も含む）モノ

露出品については、家財道具や壁と接しているモノはその家財道具や壁に属するものとした。ただし露出品のみの集合体として扱い、家財道具のどの部分に接しているかを記録した。また、テープやフック等の道具を用いて接しているモノは収納品として扱った。

最後に、それぞれの家財道具に属する全てのモノの写真をモノの領域①～④別に撮影した。

1.4 分析方法

台所の調査を行った住居それぞれの台所について、詳細な分析を行った。そして、調査した13軒全ての台所の分析結果より全体の特徴を見つけ、最終的な結論を導き出した。また、分析を進めるにあたり、大型生活財に

着目した。家財道具に属する全てのモノを①～④の領域に分け、その中で割合の大きい領域のモノについて取り上げた。

さらに、台所調査とは別に得られた、住居（50軒）、屋敷（73軒）、インタビュー（59軒）の調査結果も参照した。

2. 調査地の概要

2.1 龍郷町の特徴

龍郷町は面積の約88%は森林や原野が占め、自然に恵まれた地域である。そして宅地面積は全体の2%であるのに対し、田畑面積は9%であり、農地にも恵まれている。実際に今回の調査で、農業を行っている事例が多く見られた。

人口は6248人で、調査を行ったA地区は234人である。また、男女ともに50歳以上の人が多く、大多数が中高年層に属する。

2.2 住居の特徴

文献で確認できる、最も初期の住居形態は、オモテと呼ばれる主屋と、トーグラと呼ばれる炊事家からなる分棟型住居である。オモテは主に接客を行う空間として使われていた。それに対しトーグラは、調理、食事、団らん等、その住居に住む人々の日常生活の空間として使われていた。また、オモテは男性の空間、陽、東、右、それに対しトーグラは女性の空間、陰、西、左という意味を持っていた。

2.3 炊事空間

炊事の中心となるのはかまどだった。かまどの配置は時代によって変化が見られる。土間部分にあったかまどが、床上に築かれるようになっていった。時間が経つにつれ床部分が拡大し、トーグラは土間部分が縮小していった。古くから農業を行う人が多い地域であるにもかかわらず土間部分が縮小したのは、畑仕事にかかわる作業を、住居内部で行っていなかったことを表している。その代わりに人々は、住居のほかにある高倉の下のサスヤと呼ばれる作業場で脱穀や、豚の屠畜を行っていた。つまり、内部空間と外部空間に分けて、炊事にかかわる作業を行っていたといえる。

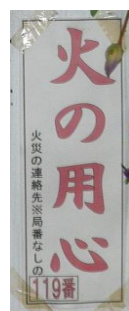
また、人々はシマ（集落を意味する）で集まり事があるときには、トーグラで煮物や酢の物などの料理をして

いた。炊事空間は、一家の食事を担うだけではなく、共同体全体の行事とも密接な関係があった。

2.4 台所の神

かまどがあった頃、人々はトーグラの西側で火の神を祀っていた。火の神はシマの言葉ではマツガナシとも呼び、マツは火を、ガナシは敬称を意味する。神体はかまどそのものである。

炊事の中心であるかまどは、いわば一家の中心である。人々は、一家に災難がないようにと、かまどで神を祀っていた。



最近では、マツガナシを祀る人はほとんどいないが、火の用心は常に人々の頭にあり、「火の用心」と書かれた紙が、A地区の全世帯に配布されている（写真1）。

写真1 「火の用心」の貼り紙

3. 分析結果

13軒それぞれの台所について、表1のように①～④の領域のモノの分布や内容物に注目し、分析を行った。

表1 住居番号4の台所の実態

①の領域のモノの分布

②の領域のモノの分布

③の領域のモノの分布

④の領域のモノの分布

①の領域のモノの内容物

家財道具番号	状態	内容物
4-5	収納品	湯沸かしポット、コーヒーマーカー等、お茶のみに必要な道具
4-6 (上)	露出品	電子レンジ
4-8	収納品	自宅用の食器
4-9	収納品	自宅用のカトラリー
4-9 (上)	露出品	泡立て器やフライ返し等の調理道具
4-11 (4)	露出品	まな板、鍋つかみ
4-12	収納品	客用 (子供も含む) の食器 (陶器)、カトラリー
4-13	収納品	客用の食器 (ガラス)
4-13 (2)	収納品	鏡

台所物品の合計数 1622点

13軒全ての台所の分析結果より、約半数の家庭で確認できた台所の共通点4つを挙げる。

1つめは、「火の用心」の貼り紙をしている事例が多い。13軒中7軒で確認できた。

2つめは、自家製の漬け物や酒を保存している事例が目立つ。13軒中6軒で確認できた。また、季節がきたら漬けるという家庭もあった。

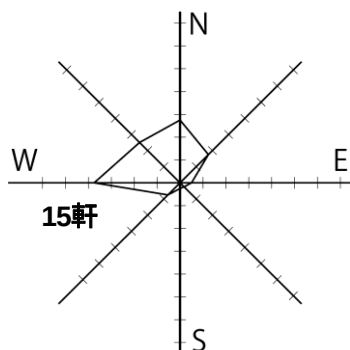
3つめは、13軒全ての家庭で客用の食器があったことだ。自宅用の食器の量よりはるかに多い客用の食器が確認できた。

4つめは、台所空間の使い方である。どの家庭でも、キッチンセットを作業の中心としているものの、広範囲にモノを配置し、炊事に関連するモノ以外のモノも確認できたことだ。

4. 考察

4.1 マツガナシの存在

「火の用心」の貼り紙は、生活者の火に対する考え方を表しているといえる。かまどがなくなった今でも、火の不始末を予防する意識が強いということは、マツガナシを信じる精神が無意識的に人々に残っているといえる。



また、50軒の住居を調べてみたところ、火を使うキッチンセットも、かつてマツガナシを祀っていた西側に向いている事例が多数確認できた（図1）。

図1 キッチンセットの向きの分布

現在、人々のマツガナシに対する意識は、目に見える物体を拝むのではなく、火の不始末がないように自戒する、形のないものに変容したと考えられる。

4.2 農業と台所

漬け物や酒を作り、台所に置いているどの家庭でも畑で農作物を育てていた。この地区の人々は、畑で収穫したものは、漬けて台所で保存する習慣があるといえる。実際、13軒のうち農業をしている家庭で、農作物をそのまま台所に置いているのは2軒だけだった。奄美は昔から、住居内部では畑仕事に関わる作業や、農作物の保存を行っていなかった。そのため、農作物そのものを台

所で保管するのではなく、いつでも食せるように加工し終わったものを台所に置くという昔からの習慣が残っているのだと考えられる。

4.3 客の存在

沢山ある客用の食器も、使い分けがされているようだった。1つは行事用のモノ、もう1つはシマの人をもてなすときのモノだ。行事用のモノは、11軒で、シマの人をもてなすときのモノは8軒で確認できた。

まず行事用のモノは、用途の決まった食器や、大皿、小皿、茶碗、お椀、湯呑み等、それぞれ数セットずつそろい、どの家庭も数十人にも対応できる数だった。中には、50セット以上ある家庭もあった。しかし最近では、それらのモノを使う家庭はほとんどなかった。緩衝材等で包むなどして、丁寧に保管している例が多かった。

しかし、たくさんある食器の一部を、目の前の行事に備えて洗っている家庭もあった。最近では、親戚をはじめ、知人が数十人の単位で集まるという機会がなくなり、血縁的に近い者や特に親しくしている者のみとの交流し

かれないだろう。ほとんど使わないにもかかわらず、大多数の家庭でこれらの食器を保管しているのは、かつては行事があるたびに大人数の客が来ていたために、客用の多くの食器を常備することが当然のことだという意識が根付いている

と考えられる。また、昔から使われてきた行事用の道具を丁寧に保管する事例も多く見られた（写真2）。



写真2 正月用の徳利

人々は行事用の食器を、使う使わないにかかわらず、無意識的に大切なモノと考え、保管しているのだろう。

このことは、人々の交流のつながりが希薄になってきたことだけではなく、行事を特別視していることも表している。

シマの人をもてなすためのモノは、湯呑みやグラス等、お茶を出すときに使う食器である。自宅用の食器とは別に、客用の食器を置いている家庭が8軒、自宅用と客用を兼用している家庭が3軒あった。そのような違いはあっても、大多数の家庭でシマの人の存在を考えたモノや、

モノの配置をしている。例えば、シマの人がよく来るため、専用の食器棚を置き、客の目に入る範囲を飾り付けている家庭、親しい人は台所まで招き入れてお茶を飲むため、テーブルには茶飲みの道具を置いているという家庭、シマの人と話をする勝手口から見える位置に大きな植物を飾る家庭、おすそわけのために道具を常備している家庭などの事例が確認できた。

A地区の人にとって、近所の人との交流は当然のことであり、日常的に密な付き合いをしている。ただし、家族ほど密接ではなく、だからといって仰々しくもない。ある一定の距離を保った付き合い方である。

4.4 台所の使い方

どの家庭でも、台所を広範囲に使っている（図2の網掛け部分）。

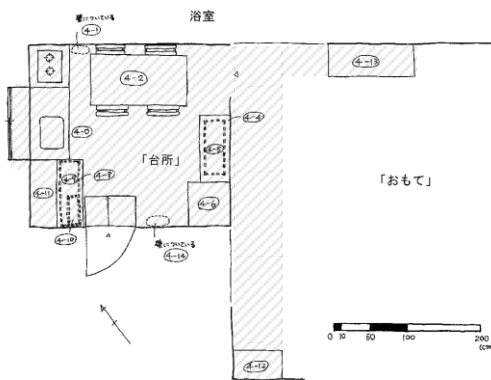


図2 住居番号4の台所見取り図

炊事をする部屋がほかの部屋と隣接している場合は、建具があっても常に解放されている例が多く、閉じている場合でも建具の外側に炊事に関連するモノが置かれていたりする。全体的に、炊事をする部屋から、炊事関連のモノが溢れ出している例が多かった。キッチンセットのある炊事をする部屋と、食事をする部屋が別々であったとしても、両方に炊事関連のモノが置かれ、機能的には明確に区別はしていない例が目立った。

また、台所には頻繁に使うモノ以外にも、最近はまだ使わないという食器や思い出の品等が保管されていた。台所は、モノを保管する空間でもあるということだ。

さらに、畑仕事で使う道具や掃除に使う道具等が台所に置かれている事例も多く見られた。台所は炊事だけではなく、その他の家事も生起する、生活の拠点となっているといえる。

そして、行事や来客に対応するためのモノを収める、パ

ックヤードの役割も併せ持つ。

5. 結論

A地区の台所は、かつてのようなパブリック要素が少なくなり、プライベート要素が拡大した。大人数の客用の食器や、沢山の料理を作ったであろう大きな鍋やざるを使わないまま保管している事例が多いことが、それを表している。

しかし、シマの人との交流は現在でも深い。大多数の家庭で、シマの人が来ることを考えたモノを保管し、空間を構成している。A地区の人にとってシマの人は、パブリックとプライベートの中間に位置する、大きな存在である。

また、現在の台所空間の使い方は、分棟型住居の頃のトーグラの使い方と似ている。人々は、「台所＝キッチンセット＝炊事をする場」としてではなく、その他の家事の拠点とし、台所を日常生活の中心の場としている。A地区の台所は、住居に暮らす人々の食だけでなく、そのほかの生活行為も支える。そして人々の交流も支える空間である。

つまり、台所は住居、そして生活の核であるといえる。

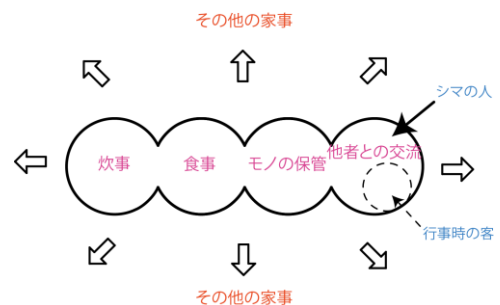


図3 台所の使い方

参考文献

- 1) 澤一良『一番わかりやすい整理入門』ハウジングエージェンシー出版局，2008年
- 2) 山口昌伴『台所空間学』建築知識，1987年
- 3) 商品科学研究所＋CID『生活財生態学－現代家庭のモノとひと－』，1980年
- 4) 今和次郎『考現学入門』筑摩書房，1987年
- 5) 鹿児島県大島支庁総務企画課『平成21年度 奄美群島の概況』，2010年
- 6) 鶴藤鹿忠『琉球地方の民家』明玄書房，1972年
- 7) 野村孝文『南西諸島の民家』相模書房，1961年
- 8) 龍郷町公式HP <http://www.town.tatsugo.lg.jp/>